入選

## ぼくの小さな親切

岡山県　倉敷東小学校　四年
吉田　光希

ぼくのお父さんは最近、会社まで自転車つうきんをしている。お父さんは、つうきん中にごみを拾っている。ぼくは、そんなお父さんを見て、なんでごみ拾いをするんだろう、なんでお父さんがごみを拾う必要があるんだろう、と思っていた。

お父さんは、

「ごみを拾って町がきれいになると気持ちが良いし、親切をした気持ちになれる。」

と言っていたけれど、ぼくはあまりりかいができなかった。休みの日にお父さんに、

「いっしょに、ごみ拾いをやりに行こう。」

と言われたけれど、ぼくはごみがきたないし、さわりたくなかったし、めんどうくさいからやりたくなかった。

ぼくが家族といっしょに、「てんりょう祭り」に行ったときのことだった。ぼくが祭りを楽しんでいると、“ごみを拾おう”という JT の屋台があった。ふくろとトングをかしてもらって、ごみを一つでもとって持ってきたら、タオルがもらえるからやろう、と家族に言われた。

でもぼくは、もっと屋台をまわりたかったから、あんまりやりたいとは思わなかった。だけど、お父さんもお母さんもやる気だったから、しかたなくやることにした。

歩きながらごみを拾っていると、いろんなごみがあった。紙コップだったり、たけぐし、カン、ペットボトルなど、お祭りの屋台のごみがたくさんあった。

ごみ拾いがおわって、JT の屋台にごみをわたしにもどると、屋台のところにいた人が、

「ごみを拾ってくれてありがとう。」

と言ってくれた。

ぼくはその言葉を聞いて、とてもうれしい気持ちになれたし、やってよかったと思った。ぼくは、今まではごみはきたないし、さわりたくないし、ごみ拾いは時間のムダと思っていた。だけど、お祭りの日にごみ拾いをやってみて、ぼくがごみを拾って町がきれいになっていると思うと、とてもうれしくなった。

その気持ちと同時に、お父さんは毎日ごみ拾いをしていて、すごいなと思った。これからは、ぼくも登下校中にある道のごみを拾ったり、お父さんと地いきのごみを拾ったりしてみようと思う。

ぼくがごみを拾うという親切を、少しでもしていくことで、地いきがどんどんきれいになっていけばいいな、と思った。